生きものをめぐって

高田　真由美

四月。入園したばかりの子ども達にとって、大好きなお母さんから離れ、幼稚園で過ごすということには、多少なりとも不安な気持ちがあるようです。そんな時、保育者は少しでも楽しいと思えるよう、その子の興味の持ちそうなことを一緒に探します。なかでも、保育室で飼っているメダカやカタツムリ、園で飼っているモルモットやウサギやにわとりなどを見ていると、ホッとするようで、保育者の手をしっかり握りしめていた手も緩み、表情も柔らかくなってきます。

モルモット

四月は、モルモットの入った飼育ケースの周りに沢山の子ども達が群がっています。家庭から持ってきたキャベツや人参をあげたり、園庭の片隅に生えたハコベを摘んできてあげたり……。自分の手に持った草をモルモットがくわえると、怖くなり手離してしまう子もいますが、食べているという感触が直(じか)に手に伝わってきて、うれしそうに「食べた！」と思わず声をあげる子もいます。四～五月にかけて

は、より多くの子がモルモットに慣れるように、飼育ケースに入ったモルモットを見たり、触るということが続きますが、五月中旬頃より、飼育サークルを出し、その中でモルモットを自由に触ったり、抱けるようにしました。さすが年中や年長の子ども達は慣れたもので、ヒョイと抱き上げ、膝の上にのせて、優しく撫でています。それを見た年少の子ども達も、最初は恐る恐る触っていますが、だんだんと自分も抱きたくなるようで、見よう見真似でモルモットをつかむのですが、強く抱きすぎたためにモルモットがもがき、びっくりしてそのまま落としてしまうこともしばしば。また、無理に口に人参を押しつけたり、捕まえようとして毛を引っ張ってしまったり……。モルモットには受難の日々です。けれども、「『キューキュー』っていうのは、『苦しいよ、嫌だよ』って言っているのだからそっと抱いてね。」と話し、その場面ごとに声をかけていくことで少しずつ抱き方、扱い方もわかってくるようです。

年少組の時のそのようなモルモットとの関わりを通して、年中や年長の子ども達は、自分達の遊びの中に、まるで友達であるかのように、モルモットを連れて行きます。時には、すべり台の上に連れて行ったり、時には台車に乗せて散歩に連れて行ったり、モルモットを中心にままごとが展開していたり……。冷や冷やしながら見ていることもありますが、子ども達がそれだけモルモットと近い関係でいられることが、うらやましくもあります。扱い方や、どこまで許容できるか、いろいろ考えなければならない点はありますが、飼育ケースの中に入っているのを、一方的に見るだけでは得られない体験をして、より多くの子にモルモットと直に触れ合う機会を作っていきたいと思います。

カエル

毎年秋の運動会の準備のために、砂場の遊具置場を動かすと、大きなカエルが出てきます。暗いジメジメした所が好きなようで、時には園庭のプランターの陰に隠れていることもあります。虫探しをしていた子ども達が、プランターを片っ端から動かし、見つかったが最後、カエルは子ども達に捕まえられ、バケツの中に入れられて、沢山の目でじっと見つめられたり、触られたり、ようやく解放された時にはぐったりしていて、きっと散々な一日だったと思っていることでしょう。けれども、子ども達は、一緒に遊んだつもりでいるようで、草むらの中に金網を持ってきて家を作っていることもありました。

このカエル、早春になると、園庭にある池に卵を産みに来るのです。池といっても三メートル四方で深さも三〇センチメートル程の小さなものですが、その小さな池に長い管がからまったように沈んでいて、何日か経つと黒いものが動き出し、オタマジャクシが生まれるのです。四、五月は、毎日オタマジャクシすくいをする子ども達でいっぱいです。それでも、すくってもすくっても黒い塊が見えるほど、オタマジャクシがいます。苦労してすくったオタマジャクシの何匹かは保育室で飼うことにして、成長していく様子を観察しました。「先生、足がはえてきた」と知らせに来る子もいれば、「来て来て、カエルがいるよ」と、オタマジャクシとカエルが結びつかない子もいます。そして、「カエルになったものは、自分で食べ物を探すから逃がしてあげましょう」と声をかけて、草むらに逃がしに行きます。自分で連れて行きたくて、先を争ってカエルを持ちたがるのですが、一センチメートルほどのカエルをつかむのは難しく、力が強すぎてつぶされてしまうのも多々あります。それでもやっと草むらに離した後は、時々「カエルいるかなー」と見に行ったり……。自分達で捕まえて、逃がしたものは、愛着もあり、心の中に残っているようです。

こんな楽しい体験をさせてくれるカエルですが、ここ二年程、池に卵を産みに来なくなりました。子ども達も残念がって、近所へ出掛けた時にみつけたカエルの卵を持ってきてくれるので、それを池に入れて、オタマジャクシが生まれるのを楽しみにしています。

先日、排水溝の蓋を開けたところ、カエルをみつけました。子ども達があまり可愛がるので、こんな所に隠れているのでしょうか。今度の春は卵を産みに来て下さいね。

モルモットやカエルに限らず、他の動植物でも、子ども達は興味を持つと、触ったり、つついたり、抱いたり、飼いたがったり、自分の物にしたがります。チョウを見ると捕まえたくなるし、花をみつけると折りたくなる。大人ならば見るだけでも満足できるのでしょうが、幼い子ども達にとっては、これは当たり前の気持ちなのでしょう。けれども、そうすることで、時には相手に嫌がられたり、相手を傷つけてしまうこともあります。そんな時は、その子の気持ちを聞いた上で、動物や植物は気持ちを言葉では表現できないけれども、保育者がその気持ちを想像して伝えます。これは、友達とうまくいかないことがあった時と全く同じです。人間だから、動物だから違うのではなく、地球上に生きる同じ生きものとして、愛の気持ちに気づく力を身につけていってほしいものです。

人間同士で言えば、「けんかをしてはいけない」と言われ頭でわかるよりも、たくさんけんかをする中で、相手の気持ちに気づいたり、けんかをするよりも仲良くした方が楽しいということが体験的にわかる方が、実感が伴い、本当に理解したことになると思います。それと同じで、生きものについても、「生きものは可愛がらなければならない」と言われて可愛がるよりも、興味を持った時に、抱いたり、

捕まえたりして、失敗もしながら、生きものと一緒にいる楽しさを体験した方が、本当の意味で、生きものを大事にしようという気持ちも生まれるのではないでしょうか。

子どもには残酷なところもあって、ありの巣穴をほじくり返したり、オタマジャクシが動かないと言って、飼育ケースをガタガタ揺らして、生きているのを確かめたり、大人から見ると、どうしてそんなことをするのかと言いたくなるような時もあります。けれども自分の幼い頃、ありの巣穴を掘り返すと、ありが慌てふためいて、卵や幼虫を別の場所に運んだり、何日かすると穴が修復されているのを見て、ありってすごいなーと感心したものでした。子どもというのは、疑問に思ったり、感じたことをそのまま相手にぶつけていくので、残酷に見えるのかもしれません。そして、そんなことをしながら生きものと仲良くなっていくのだと思います。

これからも、冷や冷やさせられることはたくさんあると思います。けれども、子ども達が、生きものことを知ったり、生きものと仲良くなるためには、直に触るということは大切な過程なので、生きものと触れ合う場をできるだけたくさん作っていきたいと思います。

（大和郷幼稚園）